

人権保育専門講座4

障がいのある子どもとの共生

『 共に育ち合う感性から、行動力へ 』

常磐会短期大学 講師 杉本 節子 さん

人権保育専門講座4では、障がいのある子どもとの共生…共に育ち合うために、どのような保育に取り組んでいけばよいかをテーマに、常磐会短期大学講師の杉本節子さんをお招きし、「共に育ち合う感性から、行動力へ」と題してご講演をいただき、3会場で92名の参加がありました。

杉本さんご自身の保育士としての経験や子どもとの出会いのなかから学んだことなど、具体的な実践をとおしてお話しいただきました。



私自身の障がい理解

～出会った園児から多くの事を学んで～



(1) 就職した年、障がい児加配担当としてのスタート（3歳児クラス）

就職した1年目にA児（自閉症）の担任をすることになりました。最初、かかわり方のモデルがなくA児の行動について回る日々でした。こちらからの声掛けに反応しないことが大半で、A児に慣れる事に必死だったことをおぼえています。A児とかかわるなかで、A児の思いをひとつずつみつつけていきました。またA児からも、行きたい所があると手を引っ張ったり、悲しい事があると「オンブして」と要求を出したりする姿もみせるようになり、信頼関係ができていきました。

(2) 4年目でB児（自閉症）との出会い（5歳児クラス）

A児とのかかわりを振り返り、その反省をもとに、B児と余裕をもってかかわることができました。

4年間、家で過ごしてきたB児は人とかかわりに困難を感じていました。特に、加配保育士の私を試して、攻撃的な姿をみせることもありました。家庭訪問をとおして、なぜこのような姿をみせているのかを知っていくことになります。

担任した当初は、B児との関係を大事にする為、2～3か月クラスとは別にB児と行動を共にしていきました。『先生はBちゃんの味方だよ』『Bちゃんの行きたかった所、ここだっ

たの』というように、二人で外への散歩や探索が中心の日々でした。そんななか、B児のもつ能力を発見しました。住宅地の各家の表札を見て回る際に「う～う～」と「1軒、1軒の表札を指して読んで」と要求する姿。そして、シーと表札を観察しているのです。その数日後、覚えた表札の難しい苗字を間違わずに書くということができました。家の並びの順番も合っていました。だいたい40軒前後を記憶できていました。そのことからクラスのなかでB児の存在に関心もたれるきっかけになっていきました。そして、保育士と1対1の関係の時期を経てクラスに入るようになっていきました。



クラスのなかでこんなやりとりがありました。
加配保育士は子どもたちが**共に育つための重要な橋渡しの役割**です。B児と他児との橋渡しです。代弁を恐れずに行きましょう。

【 他児の反応 】

【 加配保育士のかかわり 】

～事実を肯定的に伝える～

「Bちゃんだけ、ずるい」 → 「ずるくないよ、Bちゃんはみんなみたいに今まで保育所でいっぱいお散歩行けなかったから、今、行っているんだよ」

「Bちゃんこんなもできないの」 → 「今は出来ないけど、もう直ぐ出来るよ」

「なんで、しゃべらへんの」 → 「Bちゃんは心の中でいっぱい喋ってるよ。だって先生が言ってること分かってるよ」

～B児との出会いで学んだこと～

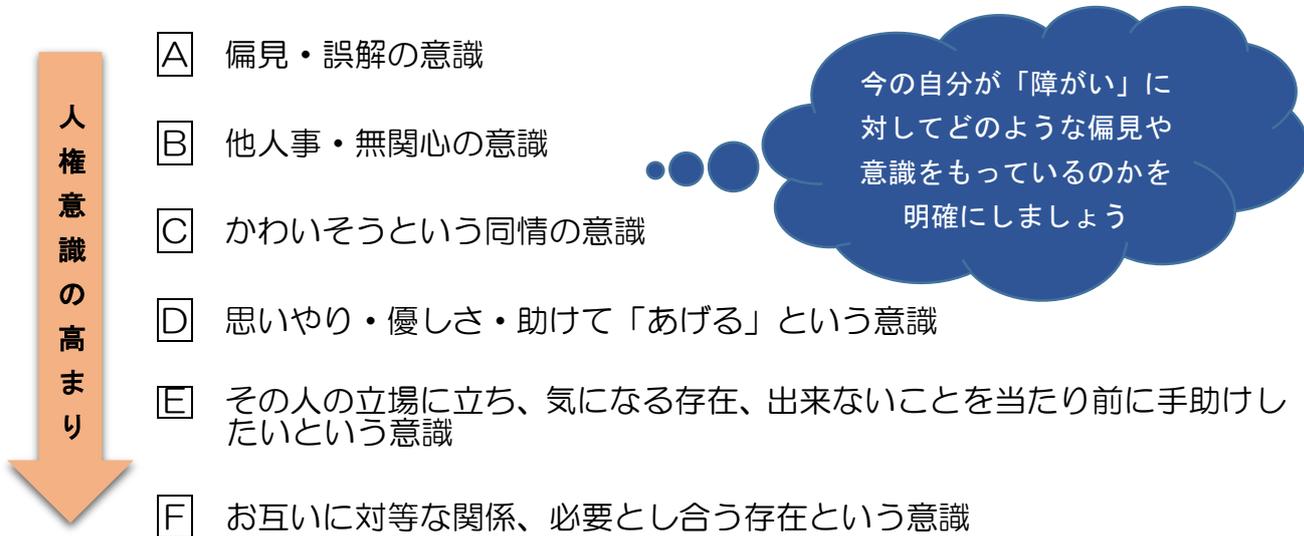
- クラス担任もB児がクラスの一員であることを絶えず意識し、加配保育士とともに連携を取る事を当たり前にする。また、加配保育士はクラスを絶えず意識し、B児とかかわる他児の姿からB児がクラスにどう位置づいていけるかを見極めていく。
- B児の『試し行動』（例：加配保育士に対しての攻撃的な姿など）を検証すると、“今、何か心地よくないよ、不安だよ、嫌だよ”というサインとして受けとることができる。今の保育がB児にとって合っていないと受けとめ、保育の見直しをしていく。
- 生活面やあそび活動を周りの子どもと一緒にさせようとせず、どの子ども一人ひとりのできる範囲があると受けとめる。今どんな援助がB児にとって必要なのかを考え、その育ちに合わせすすめていく。
- 共に育ち合う保育をすすめるうえで、当たり前のこととして、一人ひとりの子どもを尊重することがまずスタート。子どもの姿を出発点とすることが人権保育、多文化共生保育、「男女」共生保育といった実践につながっていく。

保育者としての、障がいへの理解を深めるために

～人権意識の変容をめざして～

【杉本さんのレジュメより】

～自分の内面に潜む「障がい」に対しての偏見を明確にする～



他の人権問題でも共通する「お互いに対等な関係、必要とし合う存在という意識」である **F** を到達目標にして子どもたちの保育や保育者の意識の変容をめざしていきましょう。

保護者とのパートナーシップをつむぎ、保護者と共に歩む

～ 保護者と保育者は子育てのパートナー～

親には、子どもの出生と同時に生じる役割や責任があります。そして社会にも生まれた子どもに対する責任があります。親と社会がパートナーという関係になるのです。

いじめの問題がとりあげられていますが、いじめの問題に気づけなかった社会やまわりのおとなの責任であるとは私は思っています。親の責任だけにしていると保育がすすまないのではないのでしょうか。親と保育者が共に学び合いながら、パートナーという関係をつむいでいく必要があります。私自身は出会った保護者からたくさんのことを学ばせていただきました。

また、保育についての理解を深めたり、保護者の方と一緒に学んだりするためには、子どもたちの素敵な姿、活動のなかから聞かれる個々のつぶやきなどを集めて、子どもの姿で伝えるようにしてきました。

子どものつぶやきは明日への期待がいっぱい。友だちといっしょにあそぶ楽しさ、友だちのすばらしさ、なかまとつながっていこうとする姿、このような子どもの思いを私たちおとながしっかりと受けとめ、友だちを大切に作る心を育てていきましょう。

保育計画をどう立てるか

～子どもの尊厳を柱に据える～

(1) 障がい児共生保育の実現に向けて

子どもの現状、子どもが表す姿の着目点として、障がいのあるなかまと周りの子どもとの関係があります。最初のうちは、コミュニケーションがなかなかとれません。どのようにして、障がいのある子どもの心のなかに入っていくことができるかを保育者が見極めることが大切です。決して無理強いをしてはいけません。周りの子どもとコミュニケーションがとれていない状態があれば、どのように支援していくとよいのかを考えていく必要があるのです。

(2) 障がい児共生保育の展開例

1期（4月～6月）

「自分はおとなから大事にされている」と感じながら、友だちと仲良くなる

- ・障がいのある子どもと加配保育士の信頼関係をじっくりと築く。
- ・同時に、クラスの子どもたちと担任との信頼関係を築く。

2期（7月～9月）

おとなの助けを借りながら、仲間との共感・協力の共有体験

- ・障がいのある子どもの、好きな事や心地の良い場所などが分かり、表情や目線から意志を読みとり、周りの子どもにつなげていく。
- ・ペアやグループの子どもたちに障がいのある子どもの気持ちや要求などを伝えながら、あそびや当番活動など「当たり前」の生活をする。

3期（10月～12月）

子どもどうしがかわり合い、向き合っていく

- ・加配保育士がサポートしながら、障がいのある子どもがグループの友だちと共通のあそび体験や、できないことをサポートを得ながら共に行動する（その子の障がいの特性を確かめながらすすめる）。
- ・同じグループの仲間として、気にかけて合いながら生活する。

4期（1月～3月）

子どもたち自らが立ち上がり、主体性が発揮される

- ・障がいのある子どもが他児を意識し、頼りにしていることがみえる。
- ・他児にとっても、障がいのある子どもの表情や雰囲気や気持ちを読みとる子がモデルになり、わかろうとする子が増える。



講座のなかで紹介された絵本



「手つなごうや」

文：池内エミ子

絵：中田弘司

障がいのある子どもと周りの子どもが共に成長し合う1年を描いた絵本。共生保育の1年を見通した1冊。



「きみはほんとうにステキだね」

作・絵：宮西達也

乱暴者の恐竜が本当の友だちと会うことで、自分自身をみつめなおしていきます。本当の友だちとは？



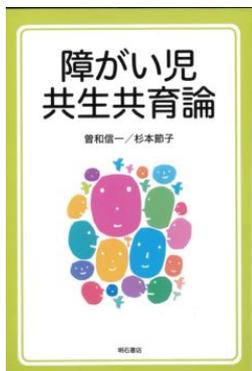
「むねがキュンとしたんや」

文：池内エミ子

絵：伊川英雄

自分の思いを言葉で伝えることが苦手な子はいませんか？勇気をもって気持ちをつたえようと、学校生活がとて楽しくなります。

今回の講演の詳しい内容はこちらの本で紹介されています。



曾和 信一 著

杉本 節子 著

明石書店 1,800円＋税（2015／4／6）

障がい児教育の理論と実践を、相互に媒介させながら展開する共生共育論。理解と支援を求めている「個性としての障がい」のある子どもを含む一人ひとりの子どもの人権を大切に、共生の視座に立って、豊かな人間形成をめざす共育としての保育・教育について考えるための一冊。

【参加者された方のアンケート】

- ・人権保育、共生保育について、絵本から入っていくとわかりやすいと思いました。たくさんの絵本を紹介してもらい、私自身とても感銘を受けました。すぐにでも取り入れ、共生保育の実践につなげていきたいと思います。
- ・一年をとおして大切にしたい着目点を具体的に教えてくださったので、とてもわかりやすかったです。明日から実践したい！！と感じさせてもらいました。
- ・今までに障がいのある子どもを担当したことがなく、“障がい”に対して無関心な自分がいることに気づいた1日でした。先生の“勉強するたびに自分の無知が暴露される”という言葉がぐさ

りと刺さります。今日教えていただいたことをどう活かすか、しっかりと考えて現場での保育に活かしていきたいと思います。

- ・ 1年間の見通しをもって共生できる保育についてとても勉強になりました。子どもたちは、障がいがある、なしにかかわらず、お互いに成長し合うなかまであることを保育者は信じていかななくてはと思います。
- ・ 今回の講座を受けて、私は障がい児の共生保育ができていないと反省しました。個人の支援と他の子どもたちをわけて考えてしまっていると感じました。さまざまな事例を出してくださったので、とても参考になりました。今後の保育にいかしていきたいと思います。保育計画の立て方について、改めて見直しことができました。
- ・ 現在、障がい児を直接担任していませんが、これから出会う子どもたちのなかで障がいのある子どもがいた場合、本日のお話を思い出しながら少しずつ保育をすすめていきたいと思います。また、人権としてテーマを拡げて考えると、今の保育のいろいろな場面に関係してくる問題ですので、2学期からもう一度保育をみつめ直していきたいと思いました。
- ・ 実践も含めて講演していただき、とても理解しやすく聞き入ってしまいました。自分が入る所、見守るところ、言葉のかけ方、他児とのかかわり、共に育つ保育という流れを教えていただけた気がします。新学期からどこまでできるかわかりませんが、子どもたちとかかわりながら成長を見極め、かかわっていきたいと思いました。
- ・ 今日の講座を受けて“絵本”が心にひびきました。読んでいただいた絵本のなかで学ぶことがたくさんあり、また、先生の読み聞かせに子どものように聞き入ってしまいました。絵本の読み聞かせをとおし、子どもたちの思いやり、人の気持ちを考えるために利用し、一人ひとりが思いやりの気持ちをもてるよう、教師として自分のクラスをつくっていかねばいけない（育てていくこと）と改めて感じました。また、障がいのある子（うまく伝えられない子）にもすすんで歩み寄ることで信頼関係ができていくと思いました。「つぶやき展」（子どものつぶやきをひろい、保護者に伝えるイベント）という取組もおもしろいなと思い、自分の園でもやってみたいと思いました。とてもわかりやすく、すごく勉強になりました。9月からの保育でいかしていけるようがんばってきたいです。
- ・ 「障がい」に対する決めつけで子どもに対応（保育）するのではなく、大きく集団のなかでの一人の子どもとして他児とのかかわりを深められるよう援助していき、子どもたちどうしでうまくかかわりをもたせられるようにしていきたいと思いました。
- ・ とても具体的な実践の仕方、計画の立て方を教えていただいたように思います。どのように実践をしていくか、イメージをもって保育の深さに挑戦していきたいという思いにさせていただき、本当にありがとうございました。私も障がい児加配からスタートしました。そのなかで、先生の思いをいっぱいもらったように思います。
- ・ 杉本先生も講演のなかで言われていたように、障がい児保育＝人権保育であるということ。今勤務している園では障がいのあるお子さんはお預かりしていませんが、基本は一つ、一人ひとりのお子さんを大事にしていかなければとあらためて思いました。

- ・障がい児保育は基本であると常日頃より自園で話をしています。普通、あたり前という目でみるのではなく、一人ひとりの発達をわかり、丁寧にかかわることで子どもに無理をさせない保育をすることができます。そうやって一人ひとりを大切にすることで、子どももお互いを認め合い、つながっていくとあらためて思いました。

